

参考資料 まちづくり研究会活動経過

<平成17年度>

平成17年 7月15日 (金)	第1回全体会	委員委嘱書交付	市特別会議室
平成17年 8月23日 (火)	第2回全体会	演習 (KJ法)	ばんば
平成17年 9月15日 (木)	第1班班別研究会		市特別会議室
平成17年 9月16日 (金)	第2班班別研究会		市特別会議室
平成17年10月11日 (火)	第2班班別研究会		市402会議室
平成17年10月21日 (金)	第1班班別研究会		市特別会議室
平成17年11月 4日 (金)	第2班班別研究会		市特別会議室
平成17年11月27~28日	先進地視察研修会	(滋賀県)	
		高島市「マキノピックランド」	
		米原市「(有)いざめ」(醒井水の宿駅内)	
		長浜市「まちづくり役場」	
		米原市「米原市役所」	
平成17年12月25日 (日)	第2班班別研究会		市積算室
平成18年 1月23日 (月)	第1班班別研究会		市501会議室
平成18年 1月29日 (日)	第2班班別研究会		市特別会議室
平成18年 2月12日 (日)	第2班班別研究会		市501会議室
平成18年 2月15日 (水)	第1班班別研究会		市第二委員会室
平成18年 2月27日 (月)	第1班班別研究会		第二委員会室
平成18年 3月 1日 (水)	第2班班別研究会		市501会議室
平成18年 3月12日 (日)	第2班班別研究会		ココス小矢部店
平成18年 3月19日 (日)	第3回全体会		市特別会議室
平成18年 3月27日 (月)	中間報告会		小矢部市農村環境改善センター

<平成18年度>

- | | | |
|-----------------|----------------|-------------------|
| 平成18年 4月25日 (火) | 第1回全体会 | 市特別会議室 |
| 平成18年 5月 9日 (火) | 第1回役員会 | 市501会議室 |
| 平成18年 5月23日 (火) | 第2回全体会 | 市特別会議室 |
| 平成18年 6月14日 (水) | 学習会 「ばんば」 | |
| | 講師 | 南砺ヨスマ倶楽部 会長 河合 声一 |
| | | 桜町石斧の会 会長 山本 護 |
| 平成18年 7月28日 (金) | 班長会議 | 市501会議室 |
| 平成18年 9月29～30日 | 先進地視察研修会 (長野県) | |
| | | 飯田市「飯田市役所」 |
| | | 「南信州観光公社」 |
| 平成18年10月26日 (木) | 第3回全体会 | 市特別会議室 |
| 平成18年11月27日 (月) | 第4回全体会 | 市501会議室 |
| 平成18年12月18日 (月) | 第5回全体会 | 市501会議室 |
| 平成19年 1月23日 (火) | 座長・副座長・班長会議 | 市特別会議室 |
| 平成19年 1月29日 (月) | 第6回全体会 | 市特別会議室 |
| 平成19年 2月16日 (金) | 第7回全体会 | |
| 平成19年 2月26日 (月) | 研究レポート報告会 | |

平成17年度 先進地現地調査

○視察期間：平成17年11月27日～28日

○調査地：滋賀県

○参加委員：村上一宏、出合正虎、坪野 睦、島津貴之、田地このみ、森 通
松本賢司、橋本里美、高地匡樹、沼田彰男

○事務局：谷敷秀次、池田孝夫

○日程：11月27日 1. 高島市「マキノピックランド」調査
2. 米原市「(有) いざめ[醒井水の宿駅内]」調査
3. 長浜市「まちづくり役場」調査
11月28日 4. 米原市「米原市役所」
①交通結節点を活かした取組調査
②遺跡を活かしたまちづくり調査

1. マキノピックランド

高島市は琵琶湖湖西の北部に位置する、農業と漁業及びマキノ高原、高木浜、スキー場、温泉等を活用した観光業に取り組んでいるまちです。

マキノピックランドは、平成8年から11年にかけて、市が総事業費8億6千万円(地元負担1割)で整備し、管理運営を地元の農事組合法人に委託している。組合員数は147人で、その内正職5人、非常勤職員28人、パート30人の従業員が、観光果樹園、レストラン、地元物産販売、地元産野菜直売、グランドゴルフ、多目的グラウンド等の管理・運営にあっている。

平成14年度には、来園者13万2000人を記録するなど、開園3年目で黒字決算となっている。また、地元産野菜直売所も年間売り上げ6,000万円を計上するなど、農家所得の底上げが図られている。

四季折々の観光資源を活かし、見るだけでなく体験型のイベントを実施することで、上手く集客に結びつけている。また、大阪、名古屋から100km圏内という地理的特性を活かして、旅行会社とのタイアップによる旅行プランの企画提案を行うなど一層の誘客に努めている。

2. (有) いざめ 「醒井水の宿駅内」

(有) いざめが一部運営している「醒井水の宿駅」は、平成13年に総工費4億100万円を掛けて整備され、翌14年にオープンしている。鉄骨2階建てで、1階は特産物販売、飲食体験室、ステージ広場等を備え、2階は湧水ギャラリー、湧水体験室、会議室が整備されている。施設運営は1階が住民有志44人の出資者で設立したまちおこし会社『(有) いざめ』が行い、2階は米原市が管理している。

地域に豊富にある湧水を活かした「豆腐づくり」や「そば打ち体験」、湧水で入れたコーヒー・水割りが飲めるカフェ&バーなどがあり、地域資源をうまく活用した取り組みがなされていた。

まちおこし会社の設立には、「採算性は深く考えていなかった」と語る江竜氏の言葉に、郷土に対する誇りと愛着を感じるとともに、損得抜きに地域のために尽くされる姿

が非常に印象に残った。

3. 「まちづくり役場」

長浜市は、空き店舗率が5割を超えた中心市街地の一角が、黒い壁の旧銀行のガラス工芸品店への改装を皮切りに、過去十数年の間に90軒の新規参入店舗で埋まり、年間200万人近くが訪れる観光地に変貌している。

まちづくり役場は、そうした成果を地域に定着させようと活動しており、ボランティア観光ガイドやプラチナプラザの事務局を請け負うほか、土日にはフリーマーケットの運営、地元民放の定例番組のスタジオや、各種視察団体の受け入れ所にもなっている。

驚くことにまちづくり役場は、行政から直接の助成を受けずに運営されている。職員4人の人件費や家賃その他の経費は、視察受け入れ料（1団体1万円と資料代1人300円）や地区内の店舗が掲載された観光チラシの作成料で賄われている。「年間200近い視察や各種イベントに走り回っていて、事務所にいることが少ない」との話からも、地域の中で、まちづくり会社として十分機能していることが窺えた。

4. 「米原市役所」

米原市は、関西・東海・北陸をつなぐ交通の要衝として、米原駅、米原インターチェンジ、JR貨物のターミナル駅を有し、「鉄道のまち」「分岐点のまち」として全国に知られている。

この立地特性を活かした滋賀物流センター（SILC）の整備が民間企業と共同で進められている。16.5haの用地を行政が取得・造成し、企業が上屋建設、物流事業を行い、仕分け・発送・保管といった物流の基本機能に加えて、防災備蓄、インターネットデータセンター等の付加機能も備えている。SILCは、コスト削減による物流の効率化だけでなく、CO2などの環境負荷の削減にも役立つことが期待されている。

その他には、路線バスの廃止に伴う、住民の生活交通手段の確保を目的とした取り組み「らくらくタクシーまいちゃん号」、また、関西圏、中京圏から約1時間30分で訪れることのできる交通条件を活かし、交流のまちをめざした地域再生計画について説明を受けた。

京極氏遺跡を活かしたまちづくりでは、かつての遺跡は地区の「お荷物」で、道路一本つくるのにも遺跡が見つかり工事が進まなかった。しかし、それだけ大切な遺跡なら逆に活用してまちづくりをしようという発想が生まれ、庭園跡を舞台にした「戦国浪漫の夕べ」が平成14年に開催され、毎年継続されている。

地域住民が中心となったイベントの開催、遺跡の解明、さらには遺跡やまちづくりに関するセミナー等には、地域住民がさまざまな形で参画しており、これらの活動を通じた地域の強い結束が感じられるとともに、市職員の住民への献身的なサポートと、住民の「利益よりも楽しもう」という精神的風土がミックスしての成果であるように感じられた。

最後に、今回の視察研修で訪れた各地域において共通していたのは、地域づくりに携わる住民、行政職員が役目・職務としてではなく、地域づくりを楽しんでいるように感じられたことである。

自然や歴史・文化をうまく活かしながら、自然体で取り組むこれらの地域には、人と人との交流にあふれ、地域住民の地域への熱い思いがあった。

平成18年度 先進地現地調査

- 視察期間：平成18年9月29日～30日
- 調査地：長野県
- 参加委員：村上一宏、島津貴之、野澤正幸、松本賢司、橋本里美、大浦健一
高地匡樹、沼田彰男
- 事務局：谷敷秀次、池田孝夫
- 日程：9月29日 1. 飯田市「飯田市役所」
 - ①地域交流施設「りんご並木三連蔵」調査
 - ②「いいだ人形劇フェスタ」調査
 - ③「飯田市歴史研究所」調査
- 9月30日 2. 飯田市「南信州観光公社」

1. 飯田市役所

飯田市は、長野県の南部に位置し、りんご並木や人形劇フェスタで知られ、「信州の小京都」と呼ばれるように、城下町の面影を残す芸術文化の香りが息づくまちである。

飯田市には、まちづくりのシンボルとして知られる「りんご並木」がある。昭和22年に発生した大火では街の75%を焼き尽くし、小京都と呼ばれた美しい街並みは広大な焼け野原と化した。その後、復興への想いを託されたりんごの苗木が、地元中学生の手で植えられことが契機となり、市民が一体となって守り育てられている。50年経った現在でも、まちづくりにおける精神的シンボルとして、市民の心に息づいている。そのりんご並木の一角に、市民交流施設「三連蔵」がある。

三連蔵は、市民の交流の場として、りんご並木沿いにあった古い蔵を改装して利用されている。一の蔵は、マーケットスペースとりんご並木資料館、二の蔵は、市民ギャラリーとして、絵画や陶器、写真など、市民の作品が展示されている。三の蔵は、喫茶室と集会室「りんご並木サロン」となっており、人と人が出会い、交流を深める空間として上手く活用されていた。

いいだ人形劇フェスタは、毎年8月初旬の4日間にわたる日本最大の人形劇の祭典として、国内外の劇団が集う人形劇として知られている。人形劇フェスタの前身のフェスティバル時代は、自前で費用を負担して運営していたが、21年目からは、市民主体の祭典に生まれ変わり、市から1,900万円の助成を受け運営されている。実際の運営は、市の文化会館に実行委員会事務局（委員60名、市職員3名）を置き、市職員が劇団や開催地区との交渉や、段取りなどの調整を行っている。市職員が3名しかいないため、ボランティアを募り対応しているが、4日間で400以上もの公演が行われるイベントの調整は、肉体的にも精神的にも職員の負担がかなり大きいことが、言葉の端々から窺えた。

しかし、この人形劇フェスタは、市民と行政の協働による手作りイベントとして、市の第4次総合計画の一つ柱に掲げられていること、また、20数年前から実施してきた歴史あるイベントということもあり、市民の愛着も深く、まちが一体となって盛り上げよう、盛り上がろうとする「夏の祭典」として、しっかりと地域に根付いているように感じられた。

飯田市歴史研究所は、旧上郷町役場を改装し、平成15年12月に市立としては全国にも例をみない地域史の研究機関としてオープンしている。

歴史研究所の目的は、「歴史価値を有する記録を収集し、保存して、広くその利用に供するとともに、歴史、文化等を科学的に調査研究して、これを叙述し、もって市民の教育、学術及び文化の向上発展並びに活力ある地域社会の創造とその持続に寄与することを目的とする・・・(設置条例から抜粋)」とある。飯田市は、山奥深い谷間のまちという地理的要因がそうさせているのか、一種独特の文化をこれまで醸成してきた経緯がある。今でも古くから残る土蔵には当時を知る貴重な歴史資料が数多く残っているとされており、吉田伸之研究部長(東京大学大学院人文社会系研究科教授)以下30人余りの研究所スタッフが、中世、近世、近現代史など時代ごとにテーマを持ち日々研究に取り組んでいる。

説明の中で非常に興味深かったのは、飯田市民は郷土歴史に対する知識欲求が非常に高いことであった。

研究員は、貴重な歴史資料から得られた研究成果は、地域にすみやかに還元することを常に意識していると聞く。実際に講演会や研究会が開催されるのだが、その際に、「郷土史に詳しい住民から鋭い指摘を受けることもある」と苦笑されていた。研究員に面と向かって異を唱えることができるほどの探求心と、郷土への関心の高さには非常に驚かされた。

県外の視察研修では、そこに住む人々との気質の違いを感じることも多い。相手の優れた点を羨ましくも思うこともあった。しかし、そこに住む人の気質は、地理的・歴史的なもの様々な要因が絡み合いつくり上げられるものであって、他所から持ってきて簡単に定着するものでもない。まちづくりもこれと同じではないかと思う。ならば、今一度地域を見つめ直し、自らの地域の良さを認識し、良いところを伸ばすことから始めなければならぬとつくづく感じさせられた。

2. 南信州観光公社

飯田市が、平成7年に通過型の観光地から滞在型への転換を目指して「体験教育旅行誘致事業」に取り組んだのが契機となり、その事業趣旨を引き継ぐかたちで、平成13年1月に(株)南信州観光公社が設立された。

主に、関東・関西の中学校・高校が行う教育旅行をターゲットにした取り組みがなされている。設立当初の受け入れ団体が学校・一般合わせて140余りだったのが、平成17年度には倍の300余りの団体を受け入れている。

公社では、「訪れた人に感動を与えること。そして、その感動は、本物からしか生まれない」をコンセプトに農業体験プログラムや味覚体験プログラム、アウトドアプログラム等々、計104プログラムのコーディネートを行っている。しかし、プログラムでは過度の演出はせず、例えば、受け入れ先の農家においても「いつもの農作業を学生達に手伝ってもらおう。食事も普段の料理をいつものように作る」など、できるだけ自然に、ありのままの体験をお客様に提供することが、受け入れられているのかもしれないとの言葉が印象的であった。

また、農業体験プログラムの成功には、実際に受け入れる農家との良好な関係も一因であるように感じられた。担当者もこの点には非常に苦心している様子が見ええた。

公社の取り組みを通じて一番感じたのは、基本理念をしっかりと持って、後は行動・実践していくことが大切であり、企画力や目的を達成するアプローチといった要素は実践の積み重ねでしか体得できないものであって、近道はないように感じられた。